マレーシア（MM２H）長期滞在ビザ取得旅行記

今般マレーシア・マイホーム・セカンド・ビザ（略称 MM2H）を取得した。昨年７月から準備にとりかかっていたので丸１年かかった。仮承認レターを４月初旬にマレーシア観光局（MM2H）から頂戴した。本承認は６か月以内にクアラルンプール（以下ＫＬ）に直接赴き、現地で預金証書作成などの必要書類を作成し、プトラジャヤに申請する必要がある。以下は本承認取得までの KL 滞在記である。（２０１５、７、１５～７，２１）

（注：MM２Hの取得にはそれなりの作業がかかる。代行業者に委託する人も多い。海外滞在経験のある方でも委託している。自分は代行業者に委託しなかったが、１年の歳月と費用を考慮すると、代行業者委託のほうが経済的であったかもしれない）

１、　７月15日（水）

ＫＬ空港には早朝到着した。今回で３回目である。２０１１，２に家内と第１次視察に来ている。そのときは漠然とMM２Hという制度や友人から現地生活概要は聞いていた。その後２０１４，１に再度調査するべく単独で１週間来た。その時ＫＬ日本人倶楽部でMM２Hセミナーを受けた。また海外長期滞在者の多いキャメロンハイランドにも足を延ばし、日本人関係者と面談した。また日本

でしばしば開催されているロングステイ財団主催のセミナーにも家内と参加し、海外長期滞在のメリットデメリットなどの知識を増やしていった。その結果、家内の了解も取れ、本件ビザ申請を決断した経緯がある。詳しくは拙文「海外ロングステイの考察」をご参照ください。

さて、飛行機はエアアジアを利用した。羽田発２３：４５発なので、離陸後すぐ睡眠に入り、起床した６時半にはＫＬ第２空港に到着していた。前回訪問時は工事中であったが、今回は新空港として立派に完成していた。ちなみにＫＬ国際空港は第１と第２がある。第１は既存のナショナルフラッグが乗り入れし、第２はＬＣＣが乗り入れている。

空港から市内までタクシーで約６０分かかった。空港内のタクシーチケットは約１００ＲＭ（１ＲＭ＝３２円相場）だった。ＫＬのタクシー事情は、通常市内ではブルーと赤白のタクシーがある。赤はバジェットタクシーと呼ばれ、乗る前に運転手と値決めする。土地勘がないと２倍以上の値段を吹っかけてくる。ブルータクシーはメーターで料金が決まる。クーラーが快適で赤タクシーの２倍程度はするが安心だ。しかし市内ならほぼ２０ＲＭでどこでも行けるので、市内移動ではタクシーは大変便利だ。

さて８時前には宿泊ホテルに到着しチェックインした。今回は１８泊するのでレジデンシャルスイートタイプにした。必要書類を確認しＨＳＢＣ銀行に赴いた。

ＨＳＢＣ銀行は日本人のMM２Ｈ保持者の多くが口座開設している。この銀行のブキビンタン支店は友人の紹介である。9時半の開店前に入店し、口座担当者に事情を説明し、普通預金口座を開設依頼した。MM２Ｈの仮承認書類がないと口座開設は出来ない。この開設手続きに９０分かかった。書類と説明で３０分かかり、４５分程度銀行側での書類作成事務にかかった。待たされている途中に朝食をとった。口座開設とデビットカードはその場で取得した。

その後ホテルに戻り、事前に手配していた日本の関係者に口座開設支店名など連絡して海外送金を依頼した。ＨＳＢＣ銀行の行員は送金には２～３日係ると言った。１７日（金）がラマダン明けの休日であるので、２０日（月）にアポイントを入れた。（注：実際の送金は翌日に完了していた）

午後、当地に数年前に移住した友人と近くでランチをし、MM２Ｈについて助言を頂いた。その他のマレーシア在住の友人にもメールを送り、本承認に必要な保険会社と健康診断するクリニックなどについて助言を求めた。しかしあまり有効な情報がなく、ネット情報を手掛かりに保険会社を探した。

2、　16日（木）

ネットにあったＭＳＩＧ（三井住友海上保険グループのマレーシア現地法人）に電話すると日本人スタッフがいて、その方から地元クリニックを紹介された。幸い直ぐに予約することが出来た。ホテルから徒歩１０分の大きなビルの中にあるクリニックに行き、健康診断を受けた。３０分待たされ、１５分程度の問診と血圧などの診断を受けた。そしてMM２Ｈに必要な書類を作成頂いた。費用は一人４０ＲＭと格安だった。

その後ＭＳＩＧに赴き相談したが、ネットにあった３００ＲＭの格安な医療保険は販売終了していた。今は１４００ＲＭの商品が最安い商品と聞き再考することとした。これは相当高いと判断した。何故なら日本人は日本で健康保険に加入しており、病気になれば日本に戻り、診察や治療を受けることが出来るのだ。今回の保険は、あくまでMM２Ｈにパスするためだけの目的であり、日本人にはリスク軽減としての効果は不要なのだ。

その後、アクサ保険（米国大手保険会社）とタクフル保険（イスラム保険会社で大手）のカウンターにも訪問した。段々と情報が集まり、各社の保険商品の比較もできるようになった。最後に訪問したＡＩＧ（米国大手会社）の価格が最も安かった。加えてMM２Ｈ申請者（日本人以外も）も多数契約しているとの説明があったので、結局ＡＩＧと契約することにした。

以上は現在 60 歳未満の家内に関するものであり、60 歳以上であればそもそもマレーシアでは医療保険そのものに入れないので、私は今回何もしていない。

１７～１９日はラマダン明け休日のため申請手続きは休憩し、ホテルでゆっくりした。マレーシアはイスラム国でありこの祭事は最もポピュラーなものである。ラマダンは３３年周期で毎年１１日ずつ繰り上がっていくとのことである。

3、　20日（月）

９時半に予約したＨＳＢＣのブキビンタン支店に赴き、送金された資金を確認し、１５万ＲＭの定期預金証書作成を依頼した。５万ＲＭは１年後には当局の承認後に引出可能なので、１０万と５万の２本立ての証書とした。

またMM２Ｈ宛てレター（当局の承認なしには引出不可能との記載あるもの）を作成頂いた。その所要時間１時間。この時プレミア会員加入の勧めをされたが、２０万ＲＭ以上の預金を常時保持する義務があり、特別なサービスと負担との比較考量が必要なので保留とした。

１１時にＡＩＧ保険に再訪し家内の保険契約を済ませた。所要時間は３０分だった。

4、　21日（火）

７時半までに朝食を済ませ、ホテルからタクシーでプトラジャヤの官公庁街に向かった。事前情報では官庁は８時半には開くので一番乗りで申請手続きしようと考えた。（注；マレーシアもアセアン他国と同じく、午前中の申請が早く進むらしいと聞いていた）

因みにこのプトラジャヤはＫＬ中心部から３５Ｋｍ南西に建設した行政機構を集めた人口都市で最近できたものだ。数年前まではMM２ＨはＫＬＣＣ（市内中心部でペトロナスタワーのある場所）で申請出来たそうだ。

さて観光局（イミグレーション）に行くと既に沢山の人々がいた。少し怯んだが、並んだ窓口に話をすると様子がおかしい。事務官は優しく丁寧に「MM２Ｈ事務局ここではなく、別のところに移転した」と告げられた。新たなオフィスはそこからタクシーで１５分程度離れたところとのこと。幸いタクシーは借り切りにして外で待機させていたので大きなロスタイムなく目的地に到着できた。

MM２Ｈオフィスは、官庁街から相当離れており、豪奢なホテルの隣のビルで、海外からの観光事情を推進する本部内にあった。また申請開始は９時３０分であったので、我々夫婦が申請者として１番であった。

番号を呼ばれて所定のブースに赴き、以下の書類を提出した。

① 定期預金証書と銀行レター、

② 保険証券支払い証書と保険会社のレター

③ 健康診断に関するクリニックのサイン入り書類

④ セキュリティボンドレター

セキュリティボンドレターにスタンプデュティ（以下スタンプ税）が無いので、押してきてほしいと要請あった。スタンプ税の処理はその場で出来ると思い込んでいたがダメだった。（注；スタンプ税は１０ＲＭで日本の収入印紙のようなもの）MM２Ｈ事務官から最寄りのサイバージャヤにある税務署を紹介された。再びタクシーで１５分程係って目的地に着いた。税務署での手続きは極めて簡単で１０分程度で書類にスタップを押してもらうことができた。

再びプトラジャヤのMM２Ｈ事務所にタクシーで戻り再度申請した。２度目なので特段説明はなく待つこと６０分。総額３，８００ＲＭの経費の支払いはクレジットカードは不可で現金支払いだった。

我々が経費の支払いに応じている頃（１２時過ぎ）には、申請者の順番を表す番号は２０数番になっていた。欧州系、中東系、中国系の申請者が多いように思えた。日本人は我々以外には１組だけであった。

もう１組の日本人の婦人と少し立ち話したところ、既にマレー滞在は１０年近くとなり、更新手続きに来たとのことである。（注；MM２Hは１０年ビザで、更新可能）５０歳でMM２Hを取得し、東海岸のクワンタンに住んでいるとのこと。そこは日本人は殆どいなくて、現地人との付き合いを楽しんでいるとのことであった。

このようにクアラルンプール以外の地に長期滞在する日本人も多い。滞在場所ではキャメロンハイランドとペナンが老舗であるが、最近イポーへ移動する日本人も多いとのことである。さらに若い夫婦ではジョホールバル（シンガポールの向かいに巨大都市建設中）への教育移住も増えている。

経費を支払って待つこと更に２０分で待望のビザは支給された。パスポートにはMM２Hのシールが２枚貼られていた。１枚は今回の入国ビザ、もう１枚は１０年間のマルチビザで「２０２５年ＸＸ日までの入国と滞在を認める。ただし如何なるタイプの労働も禁止する」と記載されていた。

（注：この禁止条項は現地企業に就職することを禁じるもので、個人コンサルタントなどの開業に問題なく、既に多数の日本人コンサルが活躍している）

（2015，7，22 記す）